論　文

李頎の士人描写詩について（三）

A Study of Li Qi's Poems Representing High Tang Literati Part Ⅲ

川口喜治
Yoshiharu KAWAGUCHI

本論は、前稿[1]に続く、李頎の士人描写にかかる作品に関する考察である。節の番号は前稿の続きとし、注番号は新たに振り直す。

（四）

前稿までにおいて、論者は、盛唐詩人・李頎の人物描写詩の特質を明らかにする準備として、唐前詩、初唐詩、杜甫を除く盛唐詩における士人（他者と自己）描写についてその流れを概観してきた。本節では、まず杜甫の士人描写詩について見てみたい。

杜甫が人物描写にたけることは、従来多くの研究者によって指摘されており、もとより杜詩を通覧すればそのことは明白である。よってここでは深く論ずることはしない。まず士人描写の代表的な作品を一首掲げることとする。「飲中八仙歌」（『全唐詩』巻二一六）[2]である。[3]

知章騎馬似乗船　　知章は馬に騎ること船に乗るに似たり
眼花落井水底眠　　眼花（まなこくら）み　井に落ちて水底に眠る
汝陽三斗始朝天　　汝陽は三斗にして始めて天に朝し
道逢麴車口流涎　　道に麴車に逢いて口より涎を流す
恨不移封向酒泉　　封を酒泉に移されざることを恨む
左相日興費萬錢　　左相は日に興きて万銭を費やし
飲如長鯨吸百川　　飲むこと長鯨の百川を吸うが如し
銜杯樂聖稱避賢[4]　　杯を銜え聖を楽しみ賢を避くと称す
宗之瀟灑美少年　　宗之は瀟灑たる美少年
擧觴白眼望青天　　觴を挙げ白眼もて青天を望む
皎如玉樹臨風前　　皎（しろ）きこと玉樹の風前に臨むが如し
蘇晉長齋繡佛前　　蘇晉は繡仏の前に長斎し
醉中往往愛逃禪　　醉中　往往にして禅から逃るるを愛す
李白一斗詩百篇　　李白は一斗　詩百篇
長安市上酒家眠　　長安市上　酒家に眠る
天子呼來不上船　　天子呼び来たるも船に上らず
自稱臣是酒中仙　　自ら称す　臣は是れ酒中仙なりと
張旭三杯草聖傳　　張旭は　三杯　草聖伝わり
脫帽露頂王公前　　帽を脱ぎ頂を露（あらわ）にす　王公の前
揮毫落紙如雲煙　　毫（ふで）を揮い紙に落とせば雲煙の如し
焦遂五斗方卓然　　焦遂は　五斗　方（はじ）めて卓然たり
高談雄辨驚四筵　　高談雄弁　四筵を驚かす

風流の高士にして高級官僚の賀知章、玄宗の甥である汝陽郡王・李璡、左丞相の李適之、貴族の子弟・崔宗之、大官の子息・蘇晋、李白、書家の張旭、伝記のよくわからない士人・焦遂ら、八人の豪放な酒飲みの生態をユーモラスに描いた著名な作品である。この詩は詩題に「歌」とあるように楽府（歌謡）を意識した酒豪数え歌的な構成をとっており、それ故に繰り出されるエピソードにいっそう自由闊達さが付与されていると考えられる。また吉川幸次郎氏が「すべては寛闊の人の寛闊ぶりであり、詩人自身の憂愁もかげろわない。また政治への関心も皆無といえる。杜詩としてはむしろ異例である。」「素材は既与である。しかしそれをこのような詩に造型したのは、杜の独創である。……七言歌行は自由な詩形であるが、この詩の自由さは特異である。このような体裁の詩、これまでにあるのを知らない。[5]」と指摘されるように、杜甫詩ひいては盛唐の

士人描写詩の中でも異彩を放つ作品であろう。論者は、前節において、盛唐に至って、士人描写がそれぞれの詩人独自の個性のもとに個別性、具体性をもって描かれるようになったことを概観した。それは、詩人たち自らがそうである士人層の多様な生態に対する鋭い観察眼さらには批評眼によってなされたものである。その観察と描写の極北が、杜甫によって達成されたと言ってもよいのではなかろうか。

次に「戲簡鄭廣文虔兼呈蘇司業源明」（同右）を掲げる。

廣文到官舍　広文は官舎に到り
繫馬堂階下　馬を堂階の下に繫ぐ
醉則騎馬歸　酔えば則ち馬に騎りて帰り
頗遭官長罵　頗る官長の罵るに遭う
才名四十年　才名　四十年
坐客寒無氈　坐客　寒きに氈無し
賴有蘇司業　賴いに蘇司業有りて
時時與酒錢　時時　酒銭を与う

杜甫の友人である広文館博士鄭虔の官僚・士人としての生活を描写した作品である。詩題の「司業」は国子司業で、蘇源明も杜甫の友人。「戲」という束縛のない詩題のもとで活写される鄭の姿は、束縛のなさゆえにかえって実際に近いとも考えられる。特に冒頭二句は出勤時の日常的な動作であり、このようなことが詩歌に描写されるのは極めて稀であろう。また四十年もの名声を保ちながら来客に「氈」座布団さえ出せない有様を描き、蘇源明に酒を恵んでもらうという個別・具体的な描写が作品のおもしろみを増している。上記の二例のみからの判断ではあるが、杜甫の士人描写はユーモアを込めた活写に特徴のひとつがあったと言えよう。[6]

次に「送高三十五書記」（同右）を掲げる。

崆峒小麥熟、且願休王師。請公問主將、焉用窮荒爲。飢鷹未飽肉。側翅隨人飛。
高生跨鞍馬　高生の鞍馬に跨るは
有似幽并兒　幽并の児に似たる有り
脫身簿尉中　身を簿尉の中より脱し
始與捶楚辭　始めて捶楚と辞す
借問今何官　借問す　今は何の官にて
觸熱向武威　熱を触して武威に向かうと
答云一書記　答えて云う　一書記
所愧國士知　愧ずる所は国士の知なりと
人實不易知、更須愼其儀。十年出幕府、自可持旌麾。此行既特達、足以慰所思。男兒功名遂、亦在老大時。常恨結歡淺、各在天一涯。又如參與商、慘慘中腸悲。驚風吹鴻鵠、不得相追隨。黃塵翳沙漠、念子何當歸。邊城有餘力、早寄從軍詩。

高適は、天宝十一載（七五二）の秋から冬にかけて、初めて河西・隴右節度使の哥舒翰幕府に掌書記として入幕し、同年冬哥舒翰に随って長安に戻り、翌十二載夏に再び河隴の地へ赴いた。この時に、この作品が作られたと考えられる。[7]杜甫が高適の一書記としての旅立ちの不遇を慰めつつ激励する送別詩の中で、高適の颯爽とした姿とその経歴が二人の対話を交えて描かれている。また「脱身」の二句が、高適が天宝八載から十一載の封丘県尉在任中の作である「封丘作」（巻二一三）に依拠していることは、仇兆鰲『杜詩詳註』（巻二）や楊倫『杜詩鏡銓』（巻二）などにおいてつとに指摘されている。高適詩を掲げる。

……
乍可狂歌草澤中　乍ろ草沢の中に狂歌すべきも
寧堪作吏風塵下　寧ぞ風塵の下に吏と作るに堪えんや
祇言小邑無所爲　祇だ小邑　為す所無しと言えども
公門百事皆有期　公門　百事　皆期有り
拜迎官長心欲碎　官長を拜迎して　心碎けんと欲し
鞭撻黎庶令人悲　黎庶を鞭撻して人をして悲しましむ
……

ここでは士人の経歴描写において、対象となる士人の詩作が踏まえられていることが注目される。「脱身」二句や訓読部分に限らず、右の杜甫詩の表現が高適の詩歌に依拠した、いわば高適詩を典故とする作品となっており、かつそれがそのまま高適の文学や人物の特徴を捉えた批評であることを論者はかつて論じた。[8]杜甫の観察眼はひとり描写対象の容姿・言動のみならず、その文学にも向けられていたのであり、そこから新たな士人描写のスタイルが生み出されたものと考えられよう。同様に「一（掌）書記」「武威（河西）」など、この詩の制作背景に即した個別・具体的な言辞が用いられていることも注意されてよか

ろう。更に注目されるのは、訓読部分の「借問」以下四句の杜甫と高適の会話である。人物の会話は楽府作品にはよく見られる。この詩は古体詩ではあるが、詩題のみから見れば楽府的歌謡を志向しているとは判断できない。しかしながらそこに「作詩者」対「詩の贈答対象者」という対話が置かれ、士人（高適）の姿の描写に躍動感を与えることに成功している。これはこれまでになかった士人描写の手法と思われる。この手法については更に探求していかなければならないであろう。

このほか、杜甫が士人のみならず自他の家族、貴族、民衆など、ひろく人物の描写に優れたことは「北征」（巻二一七）、「贈衛八處士」、「麗人行」（巻二一六）、「三吏三別」（巻二一七）などの名作により知ることができよう。

自述詩についても杜甫が優れており革新的でもあったことは、多くの杜甫詩集の圧巻「奉贈韋左丞丈二十二韻」（巻二一六）によって知ることができるであろう。

紈袴不餓死　儒冠多誤身
丈人試靜聽　賤子請具陳
甫昔少年日　早充觀國賓
讀書破萬卷　下筆如有神
賦料揚雄敵　詩看子建親
李邕求識面　王翰願卜鄰
自謂頗挺出　立登要路津。致君堯舜上、再使風俗淳。
此意竟蕭條　行歌非隱淪
騎驢三十載　旅食京華春
朝扣富兒門　暮隨肥馬塵
殘杯與冷炙　到處潛悲辛
主上頃見徵　欲然欲求伸
青冥卻垂翅　蹭蹬無縱鱗
甚愧丈人厚、甚知丈人眞。毎於百僚上、猥誦佳句新。竊效貢公喜、難甘原憲貧。
焉能心怏怏、祇是走踆踆。今欲東入海、卽將西去秦。尚憐終南山、回首清渭濱。常擬報一飯、況懷辭大臣。白鷗沒浩蕩、萬里誰能馴。

紈袴は餓死せず
儒冠は多く身を誤る
丈人　試みに静かに聴け
賤子　請う具に陳べん
甫は昔　少年の日
早くも観国の賓に充てらる
書を読みて万巻を破り
筆を下せば神有るが如し
賦は揚雄の敵と料り
詩は子建の親と看る
李邕は面を識るを求め
王翰は隣を卜するを願う
此の意は竟に蕭条たり
行歌するは隠淪に非ず
驢に騎ること三十載
旅食す　京華の春
朝には富児の門を扣き
暮には肥馬の塵に随う
残杯と冷炙と
到る処　潛かに悲辛す
主上　頃（さきごろ）徵（め）され
欲然として伸びるを求めんと欲す
青冥　却って翅を垂れ
蹭蹬　縱鱗無し

第三・四句の「丈人」の二句は、本論（一）に引いた鮑照「代東武吟」（『宋詩』巻七）「主人且勿諠、賤子歌一言。」[9]を受け、鮑照詩が「僕本寒鄉士、出身蒙漢恩。」と続いて主人公の不遇の経歴や失意が歌われることから、杜甫詩の発想と構成は鮑照詩を承けていよう。しかしながら、杜甫の自虐的なまでの自己の惨状の描写は、不遇や失意を歌うこれまでの作品に見られない強烈なリアルさを備えており、杜甫が自述詩においても画期であったと考えることができよう。当時、貧窮の士人が「飢えに追いまくられる窮乏生活で、有力者を訪問して物乞い同然にすがりつき、その供応と贈物によって食いつないでいた」「遊丐」[10]と呼ばれる実態が観察されており、杜甫詩の後半の現状自述もこれに相当しよう。杜甫の実生活が物乞い同然のものであったかはさておき[11]、本詩は当時の貧窮士人のあり方に取材され、それを如実に伝える描写と考えてよいであろう。

ただ、この詩においても、多分に自己肥大化した妄想的な要素もあろうが、青少年期の栄光と極端な落差がある悲惨な現状の描写は、論者には先に掲げた作品に見られるユーモアさえ感じられ、杜甫の儒家精神、真面目さを示すものとして引かれる「致君堯舜上、再使風俗淳。」も滑稽な大風呂敷として異化されてしまっているとも読める。結尾の「今欲」の句以下の逡巡を交えた決断も、面倒を見てくれなければよそへ行ってしまうぞという半ば脅しや嫌がらせにも似た滑稽さを見せている。なお、これと類似の構造はやはり杜甫の真面目さを示す例としてしばしば引かれる「茅屋爲秋風所破歌」（巻二一九）にも見て取れるのではなかろうか。「安得廣廈千萬間、大庇天下寒士俱歡顏、風雨不動安如山。嗚呼何時眼前突兀見此屋、吾廬獨破受凍死亦足。」の現代社会の課題にさえ通

ずる理想は、その過剰な壮大さゆえに、前半の台風によって茅葺き屋根が飛ばされ村の悪童に盗まれる騒動との落差によって滑稽さを加味されていると思う。このような構造の杜甫詩の自虐的なユーモアは探求されるべき課題であろう。

いずれにせよ、杜甫に到って、他者・自己にかかる士人描写はひとつの達成を見たといってよいであろう。

（五）

本節では、本論の主題である李頎詩における士人描写について論ずる。これまでに見たように、詩歌における士人描写は時代が進むにつれて、個別性、具体性を持つようになり、唐代に入ってめざましい発展を遂げる。特に盛唐においては、各詩人の作風や経歴、交遊が作品の描写に反映した、それまでにはほとんど見られなかった個性的な作品が多く登場した。そのひとつの達成が前節で簡単に紹介した杜甫である。杜甫は、詩歌の様々な題材に対してマルチな才能を発揮したと言えるが、一般的に詩人は、辺塞詩、山水田園詩、社会詩などのいずれかの分野、或いは近体詩の絶句、律詩、古体詩という詩形ごとに突出した才能を示すことが多い。辺塞詩人、山水田園詩人、絶句の名手などの評価が現代の文学史においても通行しているのは、その証左であろう。

李頎の場合は、従来、音楽を題材とした詩歌に評価が置かれてきたが、近年になり、その人物描写詩にも特徴を持つことが論じられるようになる。[12] 袁行霈氏が「唐代詩人の中で、李頎が人物の性格を克明に描写することに成功した第一の詩人である」[13]と評価するように、李頎詩における人物描写は、他の詩人の作品に見られない特徴があると考えられる。それは、杜甫を含めた盛唐詩人の中にあって突出した人物観察眼の現われであると考える。

まずは杜甫の「飲中八仙歌」にもその豪放磊落な酔態が描かれた張旭に李頎が贈った作品を掲げる。「贈張旭」（巻一三二）である。

01張公性嗜酒　張公は　性（うまれつき）　酒を嗜（この）み
02豁達無所營　豁達として営（いとな）む所無し
03皓首窮草隷　皓首　草隷を窮め
04時稱太湖精　時に太湖の精と称せらる
05露頂據胡牀　頂を露（あらわ）にして　胡牀に拠り
06長叫三五聲　長く叫ぶこと　三五声
07興來灑素壁　興来たれば素壁に灑（そそ）ぎ
08揮筆如流星　筆を揮いて流星の如し
09下舍風蕭條　下舎には　風蕭条たり
10寒草滿戸庭　寒草は戸庭に満つ
11問家何所有　問う　家に何の有る所ぞ
12生事如浮萍　生事　浮萍の如し
13左手持蟹螯　左手に蟹螯を持ち
14右手執丹經　右手に丹経を執る
15瞪目視霄漢　目を瞪（みは）りて　霄漢を視
16不知醉與醒　醉と醒とを知らず
17諸賓且方坐　諸賓　且方（まさ）に坐せんとし
18旭日臨東城　旭日　東城に臨む
19荷葉裹江魚　荷葉は江魚を裹み
20白甌貯香秔　白甌は香秔を貯う
21微祿心不屑　微禄　心に屑（いさぎよ）しとせず
22放神於八紘　神を八紘に放つ
23時人不識者　時人　識らざるは
24卽是安期生　即ち是れ安期生なればなり

張旭は著名な書家。史料によれば蘇州常熟県尉、右率府長史になったことがわかっている（『新唐書』巻二〇二・張旭列傳、宋・陳思『書小史』巻九）。同時代の詩人で、張旭の生態を伝えるのは、李白、杜甫、高適である。李白は「猛虎行」（巻一六五）に「……楚人毎道張旭奇、心藏風雲世莫知。三呉邦伯皆顧盻、四海雄俠兩追隨。……」と描く。杜甫は「八仙歌」のほか「殿中楊監見示張旭草書圖」（巻二二一）において張旭亡き後にその書を評価し「東呉精」と呼んでいる。[14] また高適は、「醉後贈張九旭」（巻二一四）に次のように描く、

世上謾相識　世上は相識を謾（あな）どれども
此翁殊不然　此の翁は殊に然らず
興來書自聖　興来たれば　書は自ずから聖なり
醉後語尤顛　醉後　語は尤も顛なり
白髮老閒事　白髮は閒事に老い
青雲在目前　青雲は目前に在り
牀頭一壺酒　牀頭　一壺の酒

能更幾回眠　能く更に幾回か眠る

さて、李・杜・高に対して、李頎の作品では、前半の八句に、大酒飲みで世俗の名利に興味を持たず、老年になって草書・隷書の奥義を極め、その出身（と任地）にちなんで「太湖精」と呼ばれたこと、冠や帽を被らない士人としては非礼な態度で折りたたみ椅子に座り、ながながと何度も叫んでインスピレーションのままに狂的な所作でところ構わず文字を書くことが描かれている。この八句の描写は、杜甫や高適の描写に比べると、張旭の書家としての姿をより詳細におもしろく伝えている。張旭に限っての比較ではあるが、李頎は士人の描写において、同時代のそしてそれまでの詩人たちよりも、その生態の特徴を明確に、詳細にそしておもしろく描くことを自覚的に行なっていたと考えられる。

李頎の詩歌に描かれた張旭の奇矯な生態は、『新唐書』では、

旭、蘇州呉人。嗜酒、毎大醉、呼叫狂走、乃下筆、或以頭濡墨而書、既醒自視、以爲神、不可復得也、世呼張顛。

大酒を飲み、大声で叫びながら、狂ったように走り回ったあと書をはじめる。時には髪の毛を筆にして文字を書き、その書はいわば一期一会のものであった、と伝える。論者は、李頎の作品が『舊唐書』[15]以後の豪放磊落で狂的という張旭の書家像の源になっているのではないかと推測する。[16] また杜甫詩の「東呉精」の呼称も李頎詩に淵源を求めることができるかもしれない。つまり張旭という当時の奇才を詩歌の題材としたのは李頎が最初ではなかったかという推測である。[17] 詩人達が描かなかった士人の生態を題材とし、他の詩人よりも詳細に描いたところに李頎の文学的特質を認めることができるであろう。

ちなみに張旭がながながと大声で叫んだ言葉は、言語としての明晰性を欠き、他者はもとより、あるいは本人にさえも何を言っているのか理解不能であったに違いない。ここに私たちは、いわゆる真理に達したと同時にその言語表現不可能性を確認した者の典型的な症例を観察することができるであろう。そしてその表現不可能性は、張旭には、書道という運動行為によって代償されざるを得なかったのである。[18] そう考えると張旭の大酔は、理性・理智によって妨げられた直感つまり真理に達する感性を回復させるために必須であったと言える。

李頎の観察は、ひとり狂的な書にとどまることはない。第九句「下舍」以下四句ではその清貧な生活が描かれる。第十三句「左手」の二句では、煉丹の書物という士人共通の基礎教養であった儒教からは外典と見做される書物を、さらに蟹のはさみを食いながら読むという礼節を全く無視した態度が描かれる。なおこの二句は、『晉書』巻四九・畢卓列傳「卓嘗謂人曰、得酒滿數百斛船、四時甘味置兩頭、右手持酒杯、左手持蟹螯、拍浮酒船中、便足了一生矣。」を典拠とするが、李頎詩では蟹螯に対応するものが酒から書物に置き換えられており、いっそう礼節に拘束されない態度を描くのに成功していると言える。第十六句「不知醉與醒」は、高適詩の「醉後語尤顛」とともに、酔態の特殊さを表現しているが、敢えて言うならば、杜甫、高適と異なり李頎は張旭を「酔っている」とは描いていない。張旭が常に酒に酔っているため彼にとっては「醉」と「醒」との区別が無効化していると李頎は捉えているのである。鋭利な表現であると論者は評価する。[19]

第十七句「諸賓」以下の四句は、士人達の宴会を描写する。朝日が町の東に出るまで、すなわち夜通し宴会が行なわれていたこと、ハスの葉に包まれた川魚、白いはちに盛られた香ばしいご飯などの贅沢な料理が出されていたことを記録している点で、貧富が対照的ではあるが前掲杜甫詩に見られた「遊丐」的生活と共に、当時の士人の食にまつわる生態を伝える貴重な証言であると言えよう。第二十一句「微祿」以下の四句は、李頎の張旭に対する挨拶的な言辞であろう。

次に隠士の姿を描写した作品を掲げる。「贈蘇明府」（巻一三二）である。

01蘇君年幾許　蘇君は年幾許ぞ
02狀貌如玉童　狀貌は玉童の如し
03采藥傍梁宋　藥を采りて　梁宋に傍り
04共言隨日翁　言を共にして　日翁に随う
05常辭小縣宰　常て小県の宰を辞し
06一往東山東　一たび東山の東に往く
07不復有家室　復た家室有らず
08悠悠人世中　悠悠たり　人世の中
09子孫皆老死　子孫は　皆　老死し
10相識悲轉蓬　相識は転蓬を悲しむ
11髪白還更黑　髪の白きは還って黒に更わる
12身輕行若風　身の軽きは行くこと風の若し

13 汎然無所繫　汎然として繫ぐ所無く
14 心與孤雲同　心は孤雲と同じき
15 出入雖一杖　出入するに一杖と雖も
16 安然知始終　安然として始終を知る
17 願聞素女事　願わくば　素女の事を聞き
18 去采山花叢　去きて山花の叢に采らん
19 誘我爲弟子　我を誘いて弟子と為せ
20 逍遙尋葛洪　逍遙して葛洪を尋ねん

詩題の「蘇明府」については未詳である。第五句よりかつて「明府（県令）」の任にあったが今は無官であることがわかる。隠者の生態は中国古典詩においては伝統的な題材であった。本論（二）で概観したように、盛唐になりその隠者描写に、より個別性、具体性が備わるようになる。ここに掲げた李頎詩にもその特質を見ることができる。

冒頭二句で、蘇明府の年齢に比較して若い様子が描かれる。現代においても年齢よりかなり若く見える人がいるが、そのような人物であったというのが実際に近いであろう。それが「狀貌如玉童」と形容される。特に「如玉童」「若玉童」という表現は唐以前・唐代において見つけることができなかった稀な形容である。[20]

第四句の意味がよくわからないが、第三句から蘇が梁宋地方で薬草を採って糊口を凌いでいたことがわかる。薬草の採取と販売が当時の不遇士人の生活手段であったことはよく知られている。おそらく小さな店舗を構えて民衆相手に商いをしていたのではなかろうか。薬やその調合は『本草』などの薬学関係の専門書を理解する知識と教養を持つ士人でなければできず、民衆もそれに頼ったのだと思われる。店舗には本草関係の簡単な書物も置かれていたのではないだろうか。

第五句の県令辞任は、実際には任期満了により、待選期間に入ったかあるいは次の官職にあたらなかったのであろう。第六句の「東山の東」は、具体的な場所はともかく、隠棲する土地をそこに得たのであろう。第七句「不復有家室」の描写はおもしろい。すなわち家族を持っていないことを言っている。詩句の文字通りの意味は「家族を再び持たず」となり、家族を捨ててひとりで隠棲したということも考えられるが、本論（二）所引の綦毋潛の自述詩「早發上東門」（巻一三五）に「十五能行西入秦、三十無家作路人。」のように、未婚で家庭を持っていなかったのが実際かもしれない。第九句「子孫皆老死」は文字通りは本人が長生しすぎて子や孫が先に年老いて死去したということであるが、これも実際には家族を捨てたか未婚であったため子供がいないということであろう。それを諧謔的に表現したのであろう。

ここで、隠士の姿を描く詩において、上記のように官職辞任などの隠棲の顛末、糊口や家族に関わることなどは、むしろ世俗的なこととして描かれることは少ないように思われる。李頎がそれを描くのは、前掲の張旭を描いた詩が以後の史書の張旭像になったのではないかと推測したように、人物描写におけるいわば伝記やエピソードの記録者のような視点・態度（以下、本論ではこのような意味で記録、記録性という言葉を用いる）であると評することができるのではなかろうか。本論（一）において、初唐の王績あたりから、詩歌が著名な人物ではなく、いわばともすれば歴史に名を残さないような一士人を描写し始めたことを指摘したが、李頎詩にはその流れの中で、いわば記録者（史）としてその人物の詳細を描く意図を強く伺える点にその特徴を認めることができるのではなかろうか。張旭、蘇明府の描写は、以下に掲げる李頎詩とともに、いわば詩による一士人の列伝（の一部）として評することさえできると考える。そして先行研究において李頎詩の史料性を指摘するのはこのようなことと通底すると考える。[21] また張旭描写詩において第十九句以下三句で、宴会の料理の詳細や、一見不必要な「微祿」まで言及されるのは、そういった記録性の高さの現われであると判断できる。

ところで盛唐期は、李白「戰城南」（巻一六二）、後に「詩史（詩歌による記録者）」と称される杜甫「兵車行」「麗人行」（巻二一六）「三吏・三別」（巻二一七）、少し遅れて元結の「系樂府并序」十二首（巻二四〇）、「春陵行并序」、「賊退示官吏并序」（巻二四一）を代表とした社会問題を扱った社会詩が作られる。これらの作品に典型的なように、詩歌は、当時の事件を記録してゆく態度を明確にしてゆく。とりわけ杜甫の、例えば「石壕吏」に登場する「石壕」「鄴（相州）」「河陽」は、いわゆる詩跡（歌枕）ではなく、安史の乱の最中という作詩の時点においてこそ意味を持つ個別・具体的な地名である。「石壕」は杜甫がたまたま投宿した村、「鄴」は九節度使連合軍が安史の反乱軍に大敗した場所、「河陽」は洛陽の対岸に位置し政府軍が大敗後に反乱軍と相対していた最前線である。このような描写は、作詩にいわば歴史主義的な記録性が強く意識されたこ

とを示していよう。このような潮流の中、個別の士人を描く時も、その個別性・具体性が意識されるようになり、杜甫において達成をみたような士人描写詩が出現するのであり、さらに李頎詩は、その個別・具体的な一士人の記録を詩歌において、より詳細に追求したものであると考える。比喩的に言うならば、社会詩が皇帝在位期の事件を中心に記録する紀伝体の紀であるならば、士人描写詩は一個人の列伝と位置づけることができよう。

さて第十一・二句は、仙道の修行の効果を描く。蘇明府は実際に、年齢と不相応なくらいの髪の黒さや身体の高い運動性を摂生や訓練によって身に付けていたのであろう。第十三句「汎然」以下四句は、蘇が俗世を離れた境地に自足していることを歌う。末尾の四句は、李頎の蘇明府に対する挨拶であると考えられる。「素女」は伏羲の時代の神女。ただ本論(二)で引用した王維の「贈李頎」(巻一二五)に「聞君餌丹砂、甚有好顔色。不知従今去、幾時生羽翼。」とあることから、李頎も仙道修行をしていたことがわかり、四句は単なる挨拶ではなく、仙道を修行する同好の士として交遊があったことも窺わせる。

総じてこの作品は、家族を持たない不遇士人が隠逸し仙道を求める生活を追跡している。蘇明府、前掲の張旭、ともに官僚のキャリアからは脱落した士人達が仙道、芸術、道は異なるもののそれぞれに自己の実在を確認せんとする営為を如実に伝えるものとなっていると言えよう。

もう一首、隠棲の士人を描写した作品を掲げる。「送劉十」(巻一三三)である。

01三十不官亦不娶　三十にして官せず亦た娶らず
02時人焉識道高下　時人は焉(いず)くんぞ道の高下を識らん
03房中唯有老氏經　房中には唯だ老氏の経有るのみ
04櫪上空餘少遊馬　櫪上には空しく少遊の馬を余す
05往來嵩華与函秦　嵩華と函秦とを往来し
06放歌一曲前山春　放歌　一曲　前山の春
07西林獨鶴引閒歩　西林　独鶴　閒歩を引き
08南澗飛泉清角巾　南澗　飛泉　角巾を清む
09前年上書不得意　前年に書を上(たてまつ)るも　意を得ず
10歸臥東窗兀然醉　東窓に帰臥して兀然として酔う
11諸兄相繼掌青史　諸兄は相い継いで青史を掌(つかさど)り
12第五之名齊驃騎　第五の名は驃騎に斉(ひと)し
13烹葵摘果告我行　葵を烹て果を摘み　我に行くを告ぐ
14落日夏雲縱復横　落日　夏雲　縱に復た横に
15聞道謝安掩口笑　聞道(きくなら)く　謝安は口を掩いて笑うと
16知君不免爲蒼生　知る　君の蒼生の為めにするを免れざるを

詩題の「劉十」については、第十一句「諸兄相繼掌青史」より、史学者・劉知機の五人の息子のうちの一人であるとの説があるが、誰であるかは確定していない[22]。兄弟が揃って史官に就いていたことは間違いない。なお李頎詩においては、描写対象の士人の兄弟に言及されることが目立つ。明確な理由はにわかにはわからないが、これもやはり、士人の伝の詳細を記録する者としての自覚による行為であるとも考えられる[23]。

さて第一句目、いきなり仕官と結婚のことに言及される。前掲の綦毋潜の自述詩を本論(二)で論じたとき、当時の士人においても仕官と結婚が人生における重要事項であった旨を述べたが、ここではより直截に言い放たれる。三十歳は、『禮記』曲禮上「人生……三十曰壯、有室。四十曰強、而仕。」鄭玄注「有室、有妻也。」とあり、『論語』爲政「子曰……三十而立。」とあるように男子が結婚して自立した立場を持つ年齢である。仕官の年齢は礼の記載とはことなるが、当時においては三十歳で仕官しても早くはなかったのであろう。それにしても詩の冒頭で「三十にもなって定職もなく嫁さんもいない」といやごとを当の本人に歌うこと、第二句がそれを救済しているものの、強烈な言辞であると論者は考える。もちろん詩歌において、相手の不遇が歌われることは珍しくはないが、ややもすれば触れることを躊躇する部分に敢えて踏み込んで描写する李頎詩のおもしろさの過激性を感得できる。ここにも李頎の記録者として禁忌(タブー)に拘束されない態度を見て取れよう。

次に第三・四句は、上句に結婚していない劉の寝室には妻はなく、ただ老子の道徳経があるだけだと描く。「老氏經」は、ここでは広く道教の経典を指していると思われる。また推測をたくましくするならば劉はいわゆる房中術の探求をしていたのかもしれない。李頎が仙道を追求していたことからすれば同好の士であるとも言える。さらに下句に、馬屋には足るを知って多くを求めなかった馬少遊(『後漢書』巻二四・馬援列傳)の馬が無駄に繋がれていることを描くことからすれば、妻のない劉にとって房中術がいかなる意味を持つのかという諧謔と読めよう。典雅な五言ではなく、七言ゆえの歌謡的なゆとりある描写で

あろうか。ここでも李頎詩はおもしろい。

第五句以下四句は、隠士としての生活を記す。劉が、嵩山と華山の間や、函谷関（洛陽）から長安のあたりを行き来していたというのは、隠棲生活の一方、都において仕官の活動をしていたということであろうか。ならばここにも「終南捷径」の実例を見ることができる。ちなみに「終南捷径」のあざとさと思しきは、野に遺賢あることを王朝の失態として積極的に隠士を徴する皇帝の習性を利用したこと以上に、隠棲していた終南山が都・長安の間近にあったということであろう。これが辺地の山奥であれば、帝都に隠士の名が聞こえることもほぼなく、帝都の士人たちとの交遊もほぼ無きに等しい。万が一、徴されても帝都にすぐに馳せ参じることも困難なのである（もとよりそのよう僻地の隠者には出仕の意思もないだろうが）。さて第七句は、「獨鶴」は劉の形象であるとも解釈できるが、「黄鶴楼」の仙人の故事もあることから、ここでは散歩に鶴がついてくるほど劉十が無心であると解しておく。第九句は第五句の仕官活動を承けての句であろう。皇帝直接の試験・制挙（在野の優れた人材を徴する目的で実施されたのであろう）に落第したのだと思われる。第十一・十二句では、前述のように劉十を除く兄弟が史官の職にあったことを述べた後、第五番目の弟（劉十と解釈する）の名声は漢の驃騎将軍・霍去病に等しいと指摘する。末二句でも劉を謝安に比する。作品の歌い出しから比較すると、随分と大袈裟であり、その点、諧謔にも近い。想像を逞しくするならば、劉十が李頎に対して、兄達の才能を自慢し、自身の意欲を半ば空回り的に熱く語っていたのかも知れない。李頎詩の記録性は、単に事実の正確な記録ではなく、そこに誇張や諧謔を含んだ、司馬遷『史記』列伝のおもしろさを想起させる人間性の描写という特徴をも備えていると判断できよう。ちなみに、第十三句「烹葵摘果」は、李頎が劉十を送る宴で煮たあおいと摘んだ果物（粗食の謙遜表現であろう）を出したということであろう。実際に同じであるかは別として、当時の士人達の簡素な送別の宴の実態を知る手がかりにすることができよう。

ここで論の都合上、先ほど指摘した兄弟に関する言及の実例を見てみよう。「送崔嬰赴漢陽」（巻一三四）を掲げる。

01中外相連弟與兄　　中外に相い連なる弟と兄と
02新加小縣子男名　　新たに加えらる　小県子男の名
03纔年三十佩銅印　　纔（わず）か年三十にして銅印を佩ぶ
04知爾弦歌漢水清　　知る　爾（なんじ）の弦歌して　漢水の清きを

詩題の崔嬰については『舊唐書』巻一六二・崔戎列傳に「崔戎、字可大。高伯祖玄暐、神龍初有大功、封博陵郡王。祖嬰、郢州刺史。父貞固、太原榆次尉。」とあり、門閥の子弟であることがわかる。「漢陽」は沔州治漢陽県（湖北省武漢市）。起句は、崔嬰の「兄」が朝廷の官僚、「弟」の崔嬰が地方の官僚として、地方と中央に兄弟あい連なって仕えていることを述べる。承句は、崔嬰にこのたび小さな県ではあるが「子男」の爵号が加えられたこと、実際には、漢陽県令の職を得たということを述べる。なお、伝記資料からは、崔嬰は郢州刺史となっているが、この赴任はそれ以前のことと考えられる。また、起句にある崔嬰の兄は伝記資料には見当たらない。ただし、例えば、崔嬰の父、璘の兄・璩の子（嬰のいとこ）渙が門下侍郎、父の兄・璆の子である解が光禄卿、頤が兼侍御史で終わったことが、『新唐書』巻七二下・宰相世系表二下・大房崔氏より判明し、彼らを指している可能性もある。転句は、崔嬰がわずか三十歳で銅製の印を身に付ける官僚となったことを言う。『大唐六典』巻四・禮部に「凡内外百司、皆給銅印一鈕。」とある。結句は崔の善政を予想する親しみを込めたはなむけの言葉。さてこの詩は、七言絶句の四句のうち三句が、崔嬰のキャリアや兄弟の描写に使われている。絶句特有の余韻や抒情は結句にのみあるだけで、叙事的な作品となっている。ここには、李頎詩における士人の伝記的事跡の詳細な記録態度という特徴が、かえって絶句であるがゆえに顕著に表出していると言えよう。

また「送裴騰」（巻一三二）は裴騰なる人物のいずこかへの赴任を送別する詩であるが「令弟爲縣尹、高城汾水隅。（令弟は県尹為り、高城の汾水隅に。）」とあり、裴騰の優秀な弟が県の長官を汾水のほとりにある大きなまち（汾水沿いにある太原府の治所である、太原県または晋陽県か）で勤めていることを歌う。ちなみにこの詩には「放情白雲外、爽氣連虬鬚。（情を放つ　白雲の外、爽気は虬鬚に連なる。）」と裴の「みずちがとぐろを播くように曲がっているひげ」という特徴的な容貌が点描される。

「贈別穆元林」（巻一三二）という送別詩には「彼鄉有令弟、小邑試烹鮮。（彼の郷に令弟有り、小邑　烹鮮に試す。）」とあり、穆元林の赴く先には穆の優れた弟がおり、彼も国の政治をつかさどる才能を有しながら、小さなまちの長官として任用されている不遇を歌う。またこの詩のはじめ八句には、

貳職久辭滿　弐職　満を辞すこと久し
藏名三十年　名を蔵すこと三十年
丹墀策頻獻　丹墀　策を頻に献じ
白首官不遷　白首　官は遷らず
明主日徵士　明主は日び士を徴す
吏曹何忽賢　吏曹は何ぞ賢を忽せにする
空懷濟世業　空しく懐う　済世の業
欲棹滄浪船　棹ささんと欲す　滄浪の船

と、穆元林が何らかの副官を辞してから長い時間、三十年も経つということ、その間、白髪頭の歳になるまで朝廷に策を献上しつづけた、つまり再任官のための吏部の試験を受け続けたがかなわなかったこと、明主による人材発掘つまり制挙にも合格せず、官僚の世界から脱落している現況が描かれている。

兄弟に官僚が存在することが当時の士人の世界において、仕官や一族の生計などに重要な意味を持っていたのは当然であり、それ故に、李頎詩にはその存在へのこだわりが見られるのであろう。その意味で、兄弟への言及には、やはり対象の事跡を伝記的に記録するという意図が伺えよう。

さて、上記のような、一士人の伝記やエピソードを詳細におもしろく記録するという特徴は、李頎詩の人物描写にかかる先行研究で必ず俎上に載せられる「別梁鍠」（巻一三三）において最も顕著である。吉川幸次郎等『唐詩選』（入谷仙介担当、筑摩書房、一九七三年）がこの詩を選に入れていることは論者の知る限り本邦では最も早い着眼であり、炯眼と評価できよう。前掲の吉川氏の杜甫「飲中八仙歌」に対する「七言歌行は自由な詩形であるが、この詩の自由さは特異である。このような体裁の詩、これまでにあるのを知らない。」に通ずる特異性を持つ作品であると考えられる。

01梁生倜儻心不羈　梁生は倜儻にして　心は不羈なり
02途窮氣蓋長安兒　途は窮まれども　気は長安の児を蓋う
03回頭轉眄似鵰鶚　頭を回らし転眄すれば　鵰鶚に似る
04有志飛鳴人豈知　志有りて飛鳴すれども　人豈に知らんや
05雖云四十無祿位　四十にして禄位無しと云うと雖も
06曾與大軍掌書記　曽ては大軍に与りて書記を掌す
07抗辭請刃誅部曲　辞を抗げ刃を請いて部曲を誅し
08作色論兵犯二帥　色を作し兵を論じて二帥を犯す
09一言不合龍頷侯　一言　龍頷侯に合わず
10擊劒拂衣從此棄　剣を撃ち衣を払いて此れ従り棄つ
11朝朝飲酒黃公壚　朝朝酒を飲む　黄公の壚
12脫帽露頂爭叫呼　帽を脱ぎ頂を露にして　争だ叫呼す
13庭中犢鼻昔嘗挂　庭中に犢鼻を　昔嘗て挂く
14懷裏琅玕今在無　懐裏の琅玕は　今在りや無しや
15時人見子多落魄　時人は子の落魄多きを見て
16共笑狂歌非遠圖　共に笑う　狂歌は遠図に非ずと
17忽然遣躍紫騮馬　忽然として紫騮の馬をして踊らしむれば
18還是昂藏一丈夫　還た是れ　昂蔵たる一丈夫なり
19洛陽城頭曉霜白　洛陽の城頭に　暁に霜白く
20層冰峨峨滿川澤　層氷は峨峨として　川沢に満つ
21但聞行路吟新詩　但だ聞く　路を行きて新詩を吟ずるを
22不歎舉家無擔石　歎かず　家を挙げて擔石無きを
23莫言貧賤長可欺　言う莫かれ　貧賤は長に欺らる可しと
24覆簣成山當有時　覆簣もて山を成すは当に時有るべし
25莫言富貴長可託　言う莫かれ　富貴は長に託す可しと
26木槿朝看暮還落　木槿は朝に看て暮に還た落つ
27不見古時塞上翁　見ずや　古時の塞上の翁の
28倚伏由來任天作　倚伏　由来　天の作すに任するを
29去去滄波勿復陳　滄波に去き去きて　復た陳ぶること勿かれ
30五湖三江愁殺人　五湖　三江　人を愁殺す

まず梁鍠については『國秀集』目録・巻下「執戟梁鍠二首」とあり、武官である執戟郎となったことが伝わるだけである。第一句、「倜儻」は才能が卓越していることと、世俗の礼節の拘束を拒否していること、ここでは両者の意味を併せ持とう。梁鍠に対して軽い呼称の「生」を用いていることから李頎との交遊は比較的深かったと思われる。またその関係性が、以下の梁鍠の人生に踏み込んだ自由で躍動感あふれる描写を可能にしていると考えられる。第二句で、士人としての生活、人生の行き詰まりにも関わらず、その覇気は帝国の都・長安の若者を覆い尽くすほどであることが点描される。前掲「送劉十」の冒頭と

同じく、相手のいやごとを明示しそれを救済する。「人生どん詰まりだが、気持ちだけは天下を取っている」と。次の四句も同じ構造である。鋭利な容姿・態度と大きな意志に反して世間では認められていない。礼に仕官する年齢とあり、また孔子が不惑と言った四十歳になっても、俸禄と官位がないと遠慮なく指摘する。『禮記』曲禮上「人生……四十曰強、而仕。」、『論語』爲政「子曰……四十而不惑」。第六句は、当時の不遇士人の採る一つの途であった辺境の節度使の掌書記への就任を言う。節度使の僚佐のポストは糊口とともにキャリアアップの経路であったと考えらる。[24]

しかし次の第七句「抗辭」以下の四句、それをも我が意に合わなければ、未練なく辞したエピソードを描く。当時の士人の奇矯な生態を観察するには最も興味深いくだりである。梁が掌書記という文官であるにも関わらず、厳しい言葉遣いで刃を手に取ることを願い出て部曲の兵士を処刑したこと、相手が二人の将軍といえども顔色を変えて怒り兵法を論じて衝突したエピソードが描かれる。血の気の多さはそれにとどまらず、次の二句では、相手が龍額侯に封ぜられるような大将軍（節度使）といえども、一言でも意見が合わなければ、剣を振り回し斬りつけ、決然と袂を払い、その時から掌書記の任務を棄て去った潔さを描く。この四句に描かれた挿話が実際と一致しているとは限らないが、執戟郎という武官に就任していることから考えても、いわば武闘派の士人の生態を伝えていることは確かであろう。

第十一句「朝朝」以下四句は、掌書記辞任後の飲んだくれの放縦な生活を描く。第十三句の庭にふんどしをあからさまに見えるように干すのは、阮咸・阮籍の故事に基づく。『世説新語』任誕篇「阮仲容、歩兵、居道南。諸阮居道北。北阮皆富、南阮貧。七月七日、北阮盛曬衣、皆紗羅錦綺。仲容以竿掛大布犢鼻褌於中庭。人或怪之。答曰、未能免俗、聊復爾耳」。この故事になると「任誕」と言うより嫌がらせに近い。放縦さの表現においてこの故事が選択されるところにやはり李頎詩のおもしろさがある。想像を逞しくすれば、血の気の多い梁は、近隣ともトラブルを起こしてこのような嫌がらせに走っていたのが実際かもしれない。

第十五句「時人」以下四句は、再び第一句から六句までと同じ構造がとられる。第十六句では、上述の梁の奇矯な生態が「狂歌」で象徴される。「世間の人達みんなに笑われているよ」と言うのも、遠慮のない措辞ではあるが、それが次の二句の颯爽たる姿の描写によって打ち消される。このような、下げては持ち上げる人物描写は、その落差によって人物の長所を際立たせるのみならず、「落魄」の生態をも浮き彫りにしていると論者は考える。

第十九句以下からは、少しく描写のトーンが変わり、おそらくは年長である李頎から梁鍠への教訓を含んだはなむけの言葉が中心になる。第二九句「勿復陳」（もうこれ以上言うな）という類いの表現は常套のものであろうが、ここでは、第二三・二五句「莫言云々」を承けての表現となろう。それを梁に理解させるために用いられた「覆簣成山」「木槿」「塞上翁」の例は、士人つまり伝統的知識人層にとってはいずれもいわば童蒙訓の水準であろう。しかも梁鍠は不惑に達している。それをはなむけの言葉として贈られる梁鍠は直情径行な、現代風に言うならば「大人になりきれていない」人物であったようである。それ故に、胸襟を披いた別れの宴での大言壮語や愚痴を交えた自己披瀝も多く、またその内容がこの詩の「口碑史料」となっていると考えられる。末尾の「去去滄波勿復陳」には、「もうそろそろ黙って、早く出発しなさい（くだくだ言わんと黙ってはよ行け）」の如き送り出しの意味を持つのではないか。最終句の「五湖三江愁殺人」は、そんな梁への「世間は厳しい」という李頎の「大人として」の忠告である。

現存する史料だけに依拠するならば執戟郎となったこと以外に未詳である梁鍠について、李頎がこの作品を残したことにより、当時の世間離れした一士人の生態が伝わっているのであり、ここにも、李頎詩の伝記的記録性を確認することができよう。また、杜甫の「送高三十五書記」、李頎の「送劉十」「別梁鍠」、いずれも送別の詩において、古体を用いて旅立つ者の容姿やエピソードが詳しく語られている。五言律詩を用いた挨拶の送別詩とは明らかに異なる。送別の場が当時の士人の生態を活写する詩歌を生産する場のひとつとして機能していたことを確認しておきたい。

さて、同一人物かは決定できないが、李頎は劉四という人物に対して二首の送別詩を残している。ここでも古体を用いた士人の比較的詳細なキャリアを描写している。まず「送劉四」（巻一三二）を掲げる。

01愛君少岐嶷　愛す　君の少（わか）くして岐嶷（きぎょく）たりて
02高視白雲鄉　白雲の鄉を高視するを
03九歲能屬文　九歲にして能く文を屬（つ）り

04 謁帝遊明光　帝に謁して明光に遊ぶ
05 奉詔赤墀下　詔を赤墀の下に奉じ
06 拜爲童子郎　拝して童子郎と為る
07 爾来屢遷易　爾来　屢しば遷易し
08 三度尉洛陽　三度　洛陽に尉たり
09 洛陽十二門　洛陽　十二門
10 官寺鬱相望　官寺は鬱として相望む
11 青槐羅四面　青槐は四面に羅なり
12 淥水貫中央　淥水は中央を貫く
13 聽訟破秋毫　訟えを聴いて　秋毫を破り
14 應物利干將　物に応じて　干将より利し
15 辭滿如脱屣　満を辞すること　屣を脱ぐが如く
16 立言無否臧　言を立てて　臧否無し
17 歲暮風雪暗　歳暮に風雪暗く
18 秦中川路長　秦中に川路長し
19 行人飲臘酒　行人は臘酒を飲み
20 立馬帶晨霜　立馬は晨霜を帯ぶ
21 生事豈須問　生事　豈に問うを須いんや
22 故園寒草荒　故園　寒草荒る
23 從今署右職　今従り　右職に署せらる
24 莫笑在農桑　農桑に在るを笑う莫かれ

第一句から第六句までは劉四の神童ぶりを描写する。傅璇琮氏は、それらと下記の両『唐書』の記事から劉四を劉晏としている。[25] その神童ぶりを伝える逸話は晩唐の筆記に記録されており、そのひとつ鄭処誨『明皇雜録』巻上には「玄宗御勤政樓、大張樂、羅列百妓。時教坊有王大娘者、善戴百尺竿。竿上施木山、狀瀛洲方丈。令小兒持絳節出入于其間、歌舞不輟。時劉晏以神童爲祕書正字。年方十歲。形狀獰劣、而聰悟過人。玄宗召於樓上簾下、貴妃置於膝上、爲施粉黛與之巾櫛。玄宗問晏曰、卿爲正字。正得幾字。晏曰、天下字皆正。唯朋字未正得。貴妃復令詠王大娘戴竿。晏應聲曰、樓前百戲競爭新、唯有長竿妙入神。誰謂綺羅翻有力、猶自嫌輕更著人。玄宗與貴妃及諸嬪御歡笑移時、聲聞於外。因命牙笏及黄文袍以賜之。」と伝える。[26]『舊唐書』巻一二三・劉晏列傳には、「劉晏字士安、曹州南華人。年七歲、舉神童、授祕書省正字。纍授夏縣令、有能名。歷殿中侍御史、遷度支郎中、杭隴華三州刺史、尋遷河南尹。時史朝義盜據東都、寄理長水。入爲京兆尹、頃之、加戸部侍郎、兼御史中丞、判度支、委府事於司錄張羣、杜亞、綜大體、議論號爲稱職。無何、爲酷吏敬羽所構、貶通州刺史。復入爲京兆尹、戸部侍郎、判度支。時顔眞卿以文學正直出爲利州刺史、晏舉眞卿自代爲戸部、乃加國子祭酒。寶應二年、遷吏部尚書、平章事、領度支鹽鐵轉運租庸使。坐與中官程元振交通、元振得罪、晏罷相、爲太子賓客。尋授御史大夫、領東都、河南、江淮、山南等道轉運租庸鹽鐵使如故。」とある。『新唐書』巻一四九・劉晏列傳は、晩唐の筆記の記事を『舊唐書』の劉晏であると判断したのであろう、「劉晏字士安、曹州南華人。玄宗封泰山、晏始八歲、獻頌行在、帝奇其幼、命宰相張説試之、説曰、国瑞也。卽授太子正字。公卿邀請旁午、號神童、名震一時。天寶中、纍調夏令、未嘗督賦、而輸無逋期。舉賢良方正、補温令、所至有惠利可紀、民皆刻石以傳。再遷侍御史。」と伝える。

さて第一句「岐嶷」は、幼くしてら聡明であること。第三句目は、『後漢書』巻四十上・班固列傳上「固字孟堅。年九歲、能屬文誦詩賦、及長、遂博貫載籍、九流百家之言、無不窮究。」を承け、いにしえの碩学・班固に比している。第六句の「童子郎」は、漢魏の時代に儒教経典に通暁した年少の者に儒学振興・学問奨励のために特別に与えられた官職であり、両『唐書』の神童科に挙げられたことと符合する。また劉四を送るもう一首が、「送劉四赴夏縣」（巻一三三）であり両『唐書』の夏県令就任の記事と符合する。劉四が劉晏であるならば、安史の乱後も政界で活躍し宰相までなった人物と言うことになる。

第七句・八句「爾来屢遷易、三度尉洛陽。」は、官僚としてのキャリアを積んだことを表わし、副都・洛陽県の尉に三度就任したことを言う。これは上記の史料には見えない事跡であり、傅璇琮氏の言うように史料の欠を補うことになる。[27] しかし三度洛陽県の尉となることは、いくら副都の尉であるとはいえ、横滑りをつづけているのであり、劉晏の伝記に見られるエリートコースを歩む記述とはずれてくる。ただここでは、劉晏の伝記に見られるような神童が顕彰される実態（これも士人の生態のひとつである）を李頎詩が記録していることに注目しておきたい。

第九句以下四句には洛陽のまちの描写がある。これは士人の描写ではないが、詩歌に描写された都市としてはかなり具体性をもち、特に第十二句に洛水が洛

陽を東西に横切り二分していることを描く部分に都市描写の個別性を見て取れる。このような都市の描写も、李頎の士人の描写と通底する個別性・具体性であろう。第十三句は洛陽尉としての訴訟の取り捌きの有能さを描く。「破秋毫」の「秋毫」は、「秋になってはえかわった獣の細い毛。細微な物の喩え」であり、それを破るとは、論理が精緻であることをいう。第十四句は、物事への対応において、干将の如き名剣のより鋭い切れ味を発揮することを描く。第十五以下四句は、任期満了で官職を退くことが、草履を脱ぐようにたやすく何の未練もないこと、劉四のことばは典雅であり、中正であったことを言う。ついで別れの場所の風景が描かれる。末尾二句、上句の「右職」は地位の高い官職、重要な官職であり、下句の李頎が無官で退耕していることを対比していることから、劉四はこれから新たな官職に赴任するのであろう。

総じて、ここでも、相手のキャリアが、歴史資料と相重なるかのように、勘所を得て詳しく記録されているだろう。逆にまた、この李頎詩が、後世の史料の記述の裏付けになった可能性もあると考えられる。

ついで「送劉四赴夏縣」（巻一三三）を掲げる。

01九霄特立紅鸞姿　九霄に特立す　紅鸞の姿
02萬仞孤生玉樹枝　万仞に孤生す　玉樹の枝
03劉侯致身能若此　劉侯　致身　能く此くの若し
04天骨自然多歎美　天骨　自然　歎美多し
05聲名播揚二十年　声名　播揚す　二十年
06足下長途幾千里　足下　長途す　幾千里
07擧世皆親丞相閣　世を挙げて　皆　丞相の閣に親しめども
08我心獨愛伊川水　我が心は　独り伊川の水を愛す
09脱略勢利猶埃塵　勢利を脱略すること猶お埃塵のごとく
10嘯傲時人而已矣　時人を嘯傲するのみ
11新詩數歲卽文雄　新詩　数歳にして即ち文雄なり
12上書昔召蓬萊宮　書を上りて　昔　蓬萊宮に召さる
13明主拜官麒麟閣　明主　官を拜す　麒麟閣
14光車駿馬看玉童　光車　駿馬　玉童を看る
15高人往來廬山遠　高人の往来するは廬山遠
16隱士往來張長公　隱士の往来するは張長公
17扶南甘蔗甜如蜜　扶南の甘蔗　甜きこと蜜の如く
18雜以荔枝龍州橘　雑うるに　荔枝と龍州の橘とを以てす
19赤縣繁詞滿劇曹　赤県　繁詞　劇曹に満ち
20白雲孤峯暉永日　白雲　孤峰　永日に暉く
21朝持手板望飛鳥　朝には手板を持ちて飛鳥を望み
22暮誦楞伽對空室　暮には楞伽を誦えて空室に対う
23一朝出宰汾河間　一朝　出でて汾河の間に宰たり
24明府下車人吏閒　明府　下車して　人吏閒なり
25端坐訟庭更無事　端坐　訟庭に更えて事無く
26開門咫尺巫咸山　開門　咫尺に巫咸山あり
27男耕女織蒙惠化　男は耕し女は織り　恵化を蒙る
28麥熟雉鳴長秋稼　麦は熟し雉は鳴き　秋稼長し
29明年九府議功時　明年　九府　功を議するの時
30五辟三徵當在茲　五辟　三徴　当に茲こに在るべし
31聞道桐鄉有遺老　聞道く　桐郷に遺老有りて
32邑中還欲置生祠　邑中に還た生祠を置てんと欲すと

この作品は、劉四のこの時点までの人となりとキャリア、交遊を点描し、そして新たな任地での将来予想図を描いたものであり、いわば劉四絵巻の如きものとなっている。

冒頭四句は、劉四の孤高の才能を比喩的に描き、生まれつきの風格が立派であることを指摘する。周知の通り唐代の科挙は吏部試において「身言書判」が試験項目であった。杜佑『通典』巻十五・選擧三・歴代制下・大唐には、身を「取其體貌豐偉」、言を「取其詞論辯正」、書を「取其楷法遒美」、判を「取其文理優長」と説明する。つまり身のこなし、言葉遣い、楷書の美醜、文章の優劣を試したのである。さて愛宕元氏は「書・判は日常的修練により合格点に達することは有能な人物であればほぼ可能であるが」「身と言は、長い伝統に支えられた貴族の子弟にとってはごく日常的なものであるが、それ以外のものにとっては、これほどきびしい考試はないといってよい。要するに、唐初以来の律令的身分秩序（士庶区別）の露骨な制度上への反映であって、貴族子弟以外を官僚に登用することを極力排除しようというシステムとなっているのである。」[28]と指摘する。つまり冒頭四句は、「劉侯」と尊称で呼ばれる劉四が、貴族の子弟

にしか身に付けることが難しい立ち居振る舞いを備えていることを称賛しているのである。[29]

第五・六句は、その名声が長きにわたって聞こえ、向学のために天下旅遊が数千里の長きに及んだという経歴を述べる。第八・九句は「世の中こぞって皆が宰相の御殿にお近づきになろうとするが、私はひとり伊川の水をめでる」という劉四のセリフと解する。次の二句とともに名利にあくせくしない節度ある態度を描く。第十一・十二句は、劉四が幼い時に作った清新な詩が評価されすぐに文豪扱いされたこと、天子に奉った意見書が認められて、かつて蓬莱宮（大明宮）の天子のもとに召されたことを言う。劉四が劉晏であるならば、前掲の両『唐書』にあるように、七、八歳で神童科に挙げられたことを指すと考えられる。続く二句は、劉四が天子から麒麟閣において官を授かったこと、足の速い優れた馬に引かれた立派な馬車に乗っている劉四の仙童のような姿が見られたことを描く。上句は、劉四が劉晏であるならば、「麒麟閣」は秘書省を指し、秘書省正字を授かったことと考えられる。第十五句・十六句は、その交遊が、若年にもかかわらず、東晋の高僧・廬山の東林寺の慧遠、前漢文帝の時の重臣・張釈之の子であるが終生仕えなかった張摯の如き高潔な人物に及んだことを言う。続く二句は、劉の品格の高さを、南方の名産である甘い食物（扶南のサトウキビ、ライチと龍州の橘）の美味に喩える。当時においては甘味が珍重され高級であった故の比喩と思われ、甘さ＝人を引きつける魅力ということであろう。第十九句以下四句は、繁忙を極める重要な都市の勤務においても、劉四は静かな節度ある態度で臨んでいたことを描く。「赤縣」は、ランクが最も高い県で都庁のある県。[29]劉四が前掲の「三度尉洛陽」であった劉四と同一人物ならば洛陽県を指すことになる。劉四が劉晏であるかは別として、李頎の二首の劉四が同一人物である可能性は高い。

第二三句以下は、劉四が汾河地方の夏県令に転任になったことと、そこでの予想される善政を歌う。第二九・三十句は、明年、朝廷で劉四の功績が論じられるとき、何度も天子に召し出されて劉四はここ（洛陽の都）にいるはずだという意味であろう。末二句は、桐郷において善政によって人々から祭られた漢の朱邑の故事（『漢書』巻八九・循吏傳・朱邑傳）を借りて、夏県では劉四の生祠を建てようとしていると述べ、赴任前からすでに、劉四の善政が人々に期待されていることを讃える。また下句は、劉四が劉晏であるならば、前掲『新唐書』劉晏伝の末尾「所至有惠利可紀、民皆刻石以傳。」なる記事と関連するかも知れない。

劉四を送る二首においても、送別の場で、古体によって、劉四の経歴、人となり、交遊など、士人としての生態が、李頎によって詳細に観察され、あたかも彼の伝記あるいは物語を読むかのようにおもしろく記録されていることが確認できたであろう。李頎詩における記録者としての自覚による士人描写の特徴が明確になってきたと思われる。

さてここで許された紙幅が尽きた。さらなる李頎の士人描写詩と自述詩との考察は続稿に譲りたい。

【注】

(1)「李頎の士人描写詩について（一）」（『山口県立大学国際文化学部紀要』二二、二〇一六年）、「同（二）」（『山口県立大学大学院論集』十七、二〇一六年）。

(2)本稿で引用する唐詩については、すべて『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）により、その巻数のみを示す。

(3)以下、吉川幸次郎・興膳宏『杜甫詩注第一冊』（岩波書店、二〇一二年）を参考にした。

(4)『全唐詩』は「世」に作るが、注(3)『詩注』に従い、「避」とする。

(5)注(3)。

(6)杜甫詩のユーモアについては興膳宏『杜甫のユーモア　ずっこけ孔子』「杜甫のユーモア」（岩波書店、二〇一四年）に、本稿にも引用した「飲中八仙歌」「戲簡鄭廣文虔兼呈蘇司業源明」「茅屋爲秋風所破歌」、また鄭虔と杜甫の酔態を描いた「醉時歌」（巻二一六）などを資料として論がある。川合康三『新編中国名詩選（下）』「解説」（岩波文庫、二〇一五年）も杜甫詩の諧謔に言及する。また川合氏には「韓愈の詩の二、三の人間像をめぐって」（川合『終南山の変容』、汲古書院、一九九九年）がある。これらに本稿も大いに啓発を受けた。

(7)拙稿「杜甫「送高三十五書記」詩の制作をめぐって―高適研究の一端として―」（『山口県立大学国際文化学部紀要』九、二〇〇三年）。

(8)拙稿「杜甫「送高三十五書記」詩における高適批評」（『山口県立大学国際文化学部紀要』十六、二〇一〇年）。

(9)以下、逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局、一九八三年）による。

(10)大室幹雄『パノラマの帝国　中華唐代人生劇場』第二章「放浪する知識人」（三省堂、一九九四年）。

(11)注(6)興膳氏によれば「杜甫は召使も含めると一〇人ぐらいの家族を抱えて」おり「彼らを食べさせていくのが大変」だったという。

(12)本論(一)注(8)に紹介した論著を参照。

(13)本論(一)注(7)参照。

(14)「斯人已云亡、草聖祕難得。及茲煩見示、滿目一淒惻。悲風生微絹、萬里起古色。鏘鏘鳴玉動、落落羣松直。連山蟠其間、溟漲與筆力。有練實先書、臨池眞盡墨。俊拔爲之主、暮年思轉極。未知張王後、誰並百代則。嗚呼東吳精、逸気感清識。楊公拂篋笥、舒卷忘寢食。念昔揮毫端、不獨觀酒德。」

(15)『舊唐書』巻一九〇中・賀知章列傳「時有吳郡張旭、亦與知章相善。旭善草書、而好酒、每醉後號呼狂走、索筆揮灑、變化無窮、若有神助、時人號爲張顛。」

(16)李頎詩の「史料性」に言及するものとして、梅圭「李頎詩歌成就辨析」（『雲南師範大学哲学社会科学学報』一九九六―五）、李建崑『敏求論詩叢稿』「李頎詩析論」（秀威資訊科技股份有限公司、二〇〇七年）、李建崑「試論李頎交往詩之人物形象与史料価値」（『興大中文学報』二三、二〇〇八年）。

(17)杜甫「飲中八仙歌」と先後は確定できないが、本論(一)で紹介したように李頎の生まれが六九〇年頃、杜甫が七一二年であるので、李頎が杜甫より先輩であることは確かである。

(18)飲茶『史上最強の哲学入門　東洋の哲人たち』（河出書房新社、二〇一六年）から教示を受けた。

(19)索引・データベース等を用いて、唐以前と唐代の文献を調べて見たが、李頎のような「不知醉與醒」に類似するとらえ方は見当たらなかった。調査の範囲については、拙稿『李頎詩選注稿』（二〇一二年、私家版、ISBN978-4-86398-192-8）の凡例にあたる部分を参照されたい。

(20)注(19)に同じ検索による。以下同様であるので原則として個別には注記しない。

(21)注(16)参照。「史料性」について最も積極的に述べる論著は李建崑「李頎詩析論」であり、「綜観李頎之酬贈、送別詩，写出衆多盛唐時期的狂生、逸士。這一類詩篇，不只作為応酬詩，対不同境遇之友朋，表達問候、勧慰、砥礪與関懐而已，還兼具紀録其処世抱負、描写其人格形象之功能。因此可以視為「人物詩」亦不為過。李頎常選取典型事件加以渲染，並深入到這些友人的生活細節，使其胸襟、懐抱、思想、性格甚至外貌，気象都能伝写真。対於盛唐人物之考察，也別具史料意義。」（二八～二九頁）と論ずる。ただ先行研究においては、本論が指摘するような伝記の記録者、一士人の列伝というような視点までは持ち出されていない。

(22)岑仲勉『唐人行第録(外三種)』（中華書局、一九六二年）、劉宝和『李頎詩評注』（山西教育出版社、一九九〇年）、陳貽焮主編『増訂注釈全唐詩』（劉彦成等担当、文化芸術出版社、二〇〇一年）。

(23)本論(二)で論じた岑参詩にもその一端が見られた。詩歌における兄弟描写については今後の課題としたい。

(24)陳鉄民「関於文人出塞与盛唐辺塞詩的繁栄―兼与戴偉華同志商榷」（『文学遺産』二〇〇二―三）。

(25)『唐代詩人叢考』「李頎考」（中華書局、一九八〇年。いま、二〇〇三年版による）。

(26)今ひとつは、鄭棨『開天傳信記』「開元初、上勵精理道、鏟革訛弊、不六七年、天下大治。……是時劉晏年八歲、獻東封書。上覽而奇之、命宰相出題、就中書試驗。張説、源乾曜等咸寵薦。上以晏問生秀妙、引晏於内殿、縱六宮觀看。貴妃坐晏於膝上、親爲畫眉揔卯髻。宮中人投果遺花者、不可勝數也。尋拜晏祕書省正字。」

(27)注(25)。

(28)藤原眞澄編『アジアの歴史と文化2　中国史―中世』Ⅵ「中世社会の崩壊」（愛宕元執筆、同朋舎、一九九五年）。

(29)ただし『新唐書』巻七一上・宰相世系表一上・曹州南華劉氏（「晏、字士安。相肅宗、代宗。」）では、劉晏が門閥の子孫であるとは判断しがたい。

(30)『通典』巻三十三・職官十五・州郡下「大唐縣有赤三府共有六縣、畿八十二、望七十八、緊百一十一、上四百四十六、中二百九十六、下五百五十四七等之差。京都所治爲赤縣。京之旁邑爲畿縣。其餘則以戸口多少、資地美悪爲差。」、『新唐書』巻三八・地理志二・河南府「洛陽、赤」。

（中国文学）

A Study of Li Qi's Poems Representing High Tang Literati Part III

Yoshiharu KAWAGUCHI

The purpose of this article is to research Li Qi's literature, especially to understand the features of his poems representing High Tang Literati. This article is divided into 4 parts.

Part III endeavors to clarify the features of Du Fu and Li Qi's poems representing High Tang Literati (including the poets themselves).

Du Fu's poems representing others and himself are the best attainment in the history of verse from Xian-Qin to High Tang. The humor and self-deprecation in his poems especially display the most outstanding distinction.

In the next section, this paper researched Li Qi's poems representing High Tang Literati. The features of these poems are as follows. The further specific and concrete details of the mode of life, life history, friendship of the intelligentsia amongst the High Tang Literati can be experienced through reading the interesting narratives, episodes or biographies written by Li Qi. It is unusual often to find these features in other poets' verses. And these features show that Li Qi had an explicit role as a documentary writer.

这篇论文研讨李颀文学，特别阐明了描写盛唐士人诗歌的特征。这篇文章分为四篇。

第三篇探讨索杜甫和李颀的诗歌。

杜甫在描写其他士人和自己生活经历的诗歌方面造诣颇深，而且是从先秦到盛唐以来最大的成就。尤其是他诗歌中的关于幽默和自我折磨的描写最具特色。

本稿下一部分探讨的是李颀关于描写其他士人生活经历的诗歌。这些诗歌的特征是更加详细具体地描写出了士人的生活状态、生活史、人际关系等。我们读这些诗歌的时候就如同在看有趣的故事、逸闻或者传记一般。这种独特的描写手法，在其他诗人作品中很少看得到。这些特征表明李颀有意识地把自己当成了记录者。